

ロマンティックレッドに関する追試および、 性役割パーソナリティとの関連性についての検討

薊 理津子*・篠原 彩**

要 約

ロマンティックレッドとは赤色が女性の魅力を高める現象のことである (Elliot & Niesta, 2008)。本研究では、本邦においてもロマンティックレッド現象が再現されるか検討することを目的とした。また、ロマンティックレッド現象と性役割パーソナリティとの関連性を検討することについても目的とした。結果、緑色よりも赤色の服を着た女性は魅力的であると評価され、男性は緑色よりも赤色の服を着た女性に対して、なれなれしい質問を行うことが示された。以上より、ロマンティックレッド現象が概ね再現された。ロマンティックレッドと性役割パーソナリティとの関連性は女性でのみ示された。最後に性役割パーソナリティの測定についての問題が議論された。

キーワード：魅力、赤色、ロマンティックレッド、性役割パーソナリティ

問題・目的

ロマンティックレッドとは男性において、赤色が女性の魅力を高める現象のことである (Elliot & Niesta, 2008)。Elliot & Niesta (2008) は人類の歴史上、最古の儀式では赤が女性の生殖力のシンボルとして使用されていたことや、現代ではバレンタインデーのハートに赤が用いられていること、女性の赤い下着は人気があることなどを挙げ、赤と性の関連に長い歴史があることを指摘した。このように、社会的に赤色が性と結び付けられて使用されているために、赤色と性が関連づけられ、条件づけが形成されているという。しかし、Elliot & Niesta (2008) は上述した社会的な赤の使用は、赤が性的信号として知覚されるという生物学的な性質に基づくものと考えた。そし

て、Elliot & Niesta (2008) は動物の雌の生殖器が繁殖期に赤くなること、同種の雄が赤を表出する雌に交尾を試みようとするを指摘し、進化的視点から、赤色と性には結びつきがあることを主張した。この主張について、Elliot & Niesta (2008) は、女性の背景色を操作した写真を用いて、白や灰、緑などの色と赤色とを比較し検討した。結果、男性においてのみ赤色が女性の魅力を高めることを見出し、赤と性の結びつきを実証した。

Elliot & Niesta (2008) の研究を皮切りに、ロマンティックレッドに関する研究がなされてきた。例えば、Niesta Kayser, Elliot, & Feltman (2010) は女性の服の色を操作し、男性の行動がどのように変化するかを検討している。この研究では、実験参加者の男性は赤い服もしくは緑色の服を着用した女性の写真が提示され、これから写真の女性と会話をしてもらうことが説明された後に、質問リストから女性に尋ねる質問を選択するよう求められた (研究1)。質問リストは、実

2019年11月30日受付

* 江戸川大学 人間心理学科准教授 社会心理学

** 江戸川大学 人間心理学科 2017年度卒業生

験者が予備調査を実施し作成したものであり、非常になれなれしい質問から、なれなれしくない質問で構成されていた。結果、男性は緑色の服を着た女性よりも、赤い服を着た女性に対して、なれなれしい質問を選ぶことが示された。

本邦においてロマンティックレッドに関する研究は少ないものの、女性の背景色を操作した Elliot & Niesta (2008) の追試研究 (服部, 2017) が行われており、赤色が女性の魅力を高めるという結果が確認されている。ただし、男女ともに赤色が女性の魅力を高めるという結果であり、Elliot & Niesta (2008) と完全に一致しているわけではない。

さて、服部 (2017) によって、Elliot & Niesta (2008) の結果が概ね再現されているものの、本邦においてもロマンティックレッドが再現されたと結論付けるには十分とはいえないと考えられる。なぜならば、本邦において、この現象に関する研究が少ないこと、また、背景色だけでなく、服の色など女性が身につけているものの色を操作した上で、この現象の再現性を確認するべきと考えられるからである。そこで、本研究では、女性の服の色を操作した上で、Elliot & Niesta (2008) が示したように、男性において赤が女性の魅力を高めるかを改めて検討することを第1の目的とする。加えて、本研究では男性が赤い服を着た女性になれなれしくなることを示した Niesta Kayser et al. (2010) の研究1の追試を行い、この研究の結果が再現されるか検討する。これを第2の目的とする。

また、本研究ではロマンティックレッドの個人差にも着目し、性役割パーソナリティとロマンティックレッドとの関連についても検討することを第3の目的とする。性役割とは、社会や文化によって築き上げられた男らしさ、女らしさのことであり、性役割パーソナリティとは、男らしさ、女らしさを個人がどれくらい認識しているかを意味する (伊藤, 1997)。これまでの性役割パーソナリティに関する研究から、男らしさ (以下、男性性) は独立性や強さなどの作動性、女らしさ (以下、女性性) は協調性や優しさなどの共同性

を中核とすることが示されている (Bakan, 1990)。性役割パーソナリティは性ホルモンとの関連あることが指摘されている。例えば、女性の男性性の高さは、男性に多い男性性ステロイドホルモンであるテストステロンのレベルの高さと関連するが、女性性とは関連しないことが示されている (Deady, Smith, Sharp, & Al-Dujaili, 2006)。この性役割パーソナリティと性ホルモンの関係から、男性性が高い個人は、赤い服を着た女性を魅力的に評価し、なれなれしく接する可能性があるだろう。

以上より、ロマンティックレッドが再現されるのであれば、本研究の仮説は以下の通りである。

仮説 1a: 男性は赤い服を着用した女性の魅力をも、緑の服を着用した女性よりも高く評価する。

仮説 1b: 男性は赤い服を着用した女性に対し、緑の服を着用した女性よりもなれなれしくなる。

また、性役割パーソナリティについては、男性性の高さがテストステロンのレベルの高さと関連すること (Deady et al., 2006) から、以下の仮説を立てた。

仮説 2a: 男性と女性の両方において、男性性が高いほど赤い服を着用した女性の魅力を高く評価する。

仮説 2b: 男性と女性の両方において、男性性が高いほど赤い服を着用した女性になれなれしくなる。

予備調査 1

方 法

本実験で用いる刺激を選定するために予備調査を行った。関東地方の大学生の男性 15 名、女性 13 名の計 28 名が予備調査に参加した。平均年齢は 21.57 歳 ($SD=2.25$) であった。

本実験の参加者と刺激人物との間に面識がある場合、これによって参加者による魅力の評価が影響を受けるであろうことが想定される。そのた

め、刺激人物は本実験の参加者とは異なる大学の女子学生とし、女子学生3人の無地のYシャツを着用した上半身の写真を撮影した。また、予備調査1では、これらの写真を顔のみの画像となるよう加工して使用した。質問紙では、3人の女子大学生（以降、刺激a, b, cとする）の魅力の評定を求めた。質問紙では、1ページに1人の写真を示し、各写真について、「魅力的である（7点）——魅力的ではない（1点）」、「可愛い（7点）——可愛くない（1点）」、「美しい（7点）——美しくない（1点）」の3項目に7件法で評定を求めた。写真の呈示順序はカウンターバランスをとった。授業時に質問紙を配付し、その場で回答を求め、回収した。

結果・考察

まず、各刺激で魅力の評定に用いた3項目の α 係数を算出した結果、.76～.89であり、内的整合性が高いと判断されたため、3項目の平均値を魅力の評定値として用いた。

次に、各刺激に対して、性別による魅力の評定に差があるかどうかを確認するために対応のない t 検定を行った（Table 1）。すべての刺激において有意な性差は見られなかった。

3つの刺激の魅力の評定値から、刺激aのみが魅力の評定値の midpoint である4点を超えた。また、Elliot & Niesta (2008) では魅力が平均より少し高い女性が刺激として選択されている。これらの点を踏まえて、本実験では刺激aを使用することとした。

予備調査2

方法

本実験で測定するなれなれしさの指標として、刺激の女性に行う質問のリストを作成することを目的とし、予備調査を行った。関東地方の大学生の男性7名、女性7名の計14名が参加した。平均年齢は22.07歳（ $SD = 2.25$ ）であった。以下の質問内容についてGoogle formを利用し、Web上で回答を求めた。

Niesta Kayser et al. (2010) で使用された質問リストの作成手順および内容を参考に、質問は作成された。まず、「初対面の●●大学の女子学生と、オンライン上で話す場面を想像してください。その女性に対して以下の質問をすることを考えてください。それぞれの質問はどの程度、親しくなりたいと思っする質問ですか？」と教示した。質問は、「あなたは何年生ですか?」、「あなたは、普段どこで買い物しますか?」、「あなたは付き合っている人はいますか?」などの計20項目（Table 2）であった。各項目に対して、「親しくなりたくない（1点）」から「非常に親しくなりたい（6点）」の6件法で回答を求めた。これを、各質問についてのなれなれしさの評定値とした。なお、教示とTable2中の●●には、身近な存在であるということを暗示するために予備調査に参加した大学生の所属大学と同様の大学名が記載された。

結果・考察

Table 2に各質問のなれなれしさの評定値の M と SD を示す。各質問のなれなれしさの評定値に

Table 1 各刺激の魅力の全体と性別ごとの M と SD 、および t 検定の結果

刺激	全体		男性		女性		t ($df = 26$)
	M	SD	M	SD	M	SD	
a	4.23	1.17	4.02	1.20	4.46	1.13	-0.99
b	3.55	1.08	3.38	1.08	3.74	1.10	-0.89
c	2.81	1.30	2.49	1.10	3.18	1.45	-1.43

Table 2 質問項目のなれなれしさの評定値に関する全体と男女別の M と SD , t 検定の結果

質問項目	全体		男性		女性		t ($df=12$, 15のみ $df=8.63$)
	M	SD	M	SD	M	SD	
1 あなたは、何年生ですか？	2.71	1.14	3.14	1.22	2.29	0.95	1.47
2 あなたは、何学科ですか？	3.00	1.04	3.43	0.98	2.57	0.98	1.64
3 あなたは、なぜ●●大学に入りましたか？	2.93	1.27	3.43	1.27	2.43	1.13	1.55
4 あなたの、出身地はどこですか？	3.64	1.08	4.14	0.90	3.14	1.07	1.89 [†]
5 あなたの、血液型は何型ですか？	3.21	1.58	3.43	1.72	3.00	1.53	0.49
6 あなたの、好きな食べ物は何ですか？	3.64	1.55	4.14	1.46	3.14	1.57	1.23
7 あなたは、普段どこで買い物しますか？	3.93	1.44	4.29	1.38	3.57	1.51	0.92
8 あなたは、休日に何をして過ごす事が多いですか？	3.86	1.51	4.29	1.38	3.43	1.62	1.07
9 あなたは、どこでアルバイトしていますか？	3.00	1.57	3.43	1.27	2.57	1.81	1.02
10 あなたの、好きな音楽は何ですか？	4.07	1.14	4.14	0.69	4.00	1.53	0.23
11 あなたは、何の映画が好きですか？	4.07	1.14	4.14	0.69	4.00	1.53	0.23
12 あなたの、ラインのIDを教えてください。	4.79	1.37	5.00	1.00	4.57	1.72	0.57
13 あなたは、家で何をするのが好きですか？	3.93	1.21	4.00	1.16	3.86	1.35	0.21
14 あなたが、尊敬している人物は誰ですか？	3.36	1.34	3.29	1.11	3.43	1.62	-0.19
15 あなたは、付き合っている人はいますか？	3.86	1.88	4.43	1.13	3.29	2.36	1.15
16 あなたは、どのような異性のタイプが好きですか？	4.71	1.59	5.00	1.29	4.43	1.90	0.66
17 あなたは、異性に何を求めますか？	4.50	1.40	4.71	1.38	4.29	1.50	0.56
18 あなたは今、彼女・彼氏が欲しいですか？	4.79	1.37	5.14	0.90	4.43	1.72	0.97
19 あなたの、悩みごとは何ですか？	4.00	1.66	4.29	1.11	3.71	2.14	0.63
20 あなたの、家族関係は良いですか・悪いですか？	3.93	1.64	4.00	1.41	3.86	1.95	0.16

[†] $p < .10$

ついて性差を確認するために、対応のない t 検定を行った結果、「4. あなたの、出身地はどこですか？」にのみ有意傾向が示された。そのため、この項目を除いた 19 項目を、本実験で用いる実験刺激の女性に行う質問のリストとして使用することとした。本実験のなれなれしさを測定する項目を得点化するには、本予備調査の全体の平均値を用いた。

本実験

方 法

実験参加者 関東地方の大学生 132 名（男性 80 名、女性 50 名、不明 2 名、平均年齢 18.44 歳 ($SD=0.97$)) が実験に参加し、性別の記入がない 2 名と、教示に従って回答していない 8 名を除き、最終的に 122 名（男性 74 名、女性 48 名、平均年齢 18.42 歳 ($SD=0.98$)) を分析対象とした。赤

色条件 65 名、緑色条件 57 名となった。

材料 予備調査で中程度の魅力であることが確認された女性の写真を使用した。本実験では女性が着用している Y シャツの色を、Paint.NET V3.5.11 を用いて加工した。色は、Niesta Kayser et al. (2010) で使用されたカラーコード（赤：L 50.3, C 47.0, H 25.0; 緑：L 50.4, C 46.9, H 141.2）を RGB に変換して、刺激を作成した。

質問紙 ①性別・年齢、②魅力の測定のために予備調査 1 と同様の 3 項目（7 件法）を用い、3 項目の合成得点を魅力の得点として分析に使用した ($\alpha=.95$)。③予備調査 2 で選定した 19 の質問で構成されるリストから、女性に行う質問を 4 つ選択するよう参加者に求めた。分析には、参加者が選択した 4 つの質問の、予備調査 2 で得られた、なれなれしさの得点の合計を算出して使用した。例えば、Table 2 の項目 1, 2, 8, 12 を選択した場合、それらの平均得点を合計する ($2.71+3.00$

+3.86+4.79)。合計得点である 14.36 がなれなれしきの得点となる。④性役割パーソナリティを測定するために、Bem Sex Role Inventory (BSRI) (Bem, 1974) 日本語版 (東, 1991) の男性性 20 項目 (例:「自分の判断や能力を信じている」, 「自分の信念を曲げない」) ($\alpha=.87$), 女性性 20 項目 (例:「従順な」, 「明るい」) ($\alpha=.88$) を用いた。「まったく当てはまらない (1 点)」から「よく当てはまる (7 点)」の 7 件法で尋ねた。

手続き 実験は集団実験で行われた。まず、質問紙を配布し、年齢と性別について回答を求めた。その後、女性の写真をスクリーンで 10 秒間提示した。このとき、「今からスライドに●●大学生のある女子生徒を提示します。この女性とオンライン上で話す場面を想像してください」と教示した。半数の参加者には赤い服を着た女性の画像 (赤条件) を、残りの半数には緑色の服を着た女性の画像 (緑条件) を提示し、参加者間計画とした。画像提示後、魅力の評定および、女性に行う質問を質問リストから 4 つ選択するよう求めた。最後に、BSRI 日本語版 (東, 1991) に回答を求めた。なお、教示の●●には、身近な存在であるということを暗示するために本実験に参加した大学生の所属大学と同様の大学名が記載された。

結果

まず、先行研究 (Elliot & Niesta, 2008; 服部, 2017) と同様の結果が得られるかを確認するために、性別と色条件を独立変数、魅力に従属変数とした参加者間計画の 2 要因分散分析を行った (Figure 1)。結果、魅力において色条件 ($F(1, 118) = 6.09, p < .05, \eta_p^2 = .05$) (赤 $M = 3.59, SD = 1.35$ and 緑 $M = 3.03, SD = 1.31$) と性別 ($F(1, 118) = 7.90, p < .01, \eta_p^2 = .06$) (男性 $M = 3.09, SD = 1.39$ and 女性 $M = 3.71, SD = 1.23$) で有意な主効果が示されたが、交互作用は有意ではなかった ($F(1, 118) = 0.25, ns$)。次に、Niesta Kayser et al. (2010) と同様の結果が得られるかを確認するために、なれなれしきについても同様の分析を行った (Figure 2)。色条件に有意な主効果が示され ($F(1, 118) = 4.25, p < .05, \eta_p^2 = .04$) (赤 $M =$

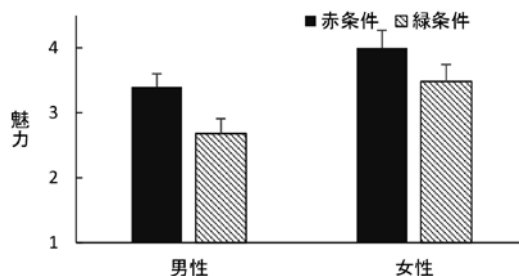


Figure 1 性別×色条件における魅力の平均値

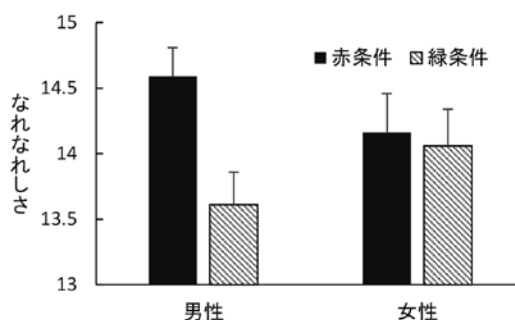


Figure 2 性別×色条件における、なれなれしきの平均値

注) Figure 1 と 2 ともに、エラーバーは標準誤差を示す。

14.44, $SD = 1.52$ and 緑 $M = 13.80, SD = 1.29$), 性別には有意な主効果は見られなかった ($F(1, 118) = .00, ns$)。なれなれしきについては交互作用に有意傾向が認められた ($F(1, 118) = 2.83, p < .10, \eta_p^2 = .02$)。単純主効果の検定を行った結果、男性において色条件の単純主効果が有意であったが ($F(1, 118) = 8.80, p < .01, \eta_p^2 = .07$), 女性において有意な結果は得られなかった ($F(1, 118) = 0.06, ns$)。また、色条件における性別の単純主効果については、赤と緑ともに有意な結果は示されなかった (赤 $F(1, 118) = 1.40, ns$; 緑 $F(1, 118) = 1.43, ns$)。

次に、ロマンティックレッドと性役割パーソナリティとの関連性を検討する。小出 (1999) は性役割パーソナリティの測定について、構成概念妥当性という点から考えると、男性性を測定する項目の得点は男性の方が女性よりも高く、女性性を測定する項目の得点は女性の方が男性よりも高くなるはずであると指摘している。BSRI を作成し

Table 3 BSRI の各項目に関する全体と男女別の *M* と *SD*, *t* 検定の結果

項目	全体		男性		女性		<i>df</i>	<i>t</i>
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>		
1 自分の判断や能力を信じている (M)	4.04	1.53	4.19	1.50	3.81	1.58	120	1.33
2 従順な (F)	3.95	1.27	3.84	1.27	4.13	1.25	120	-1.23
3 自分の信念を曲げない (M)	4.56	1.51	4.55	1.69	4.56	1.18	120	-0.03
4 明るい (F)	4.39	1.52	4.26	1.67	4.60	1.25	120	-1.23
5 独立心がある (M)	4.24	1.51	4.38	1.57	4.02	1.39	120	1.30
6 はにかみ屋の (F)	4.06	1.36	4.00	1.43	4.15	1.24	120	-0.58
7 スポーツマンタイプの (M)	3.11	1.78	3.19	1.80	3.00	1.75	120	0.57
8 情愛細やかな (F)	4.23	1.41	4.08	1.52	4.46	1.18	120	-1.45
9 自己主張的な (M)	4.04	1.28	4.14	1.36	3.90	1.15	120	1.01
10 おだてにのる (F)	4.24	1.51	4.50	1.48	3.83	1.48	120	2.43*
11 個性が強い (M)	4.48	1.61	4.64	1.69	4.23	1.45	119	1.39
12 忠実な (F)	4.29	1.17	4.22	1.32	4.40	0.89	120	-0.83
13 自分の意見を押し通す力がある (M)	3.89	1.60	3.93	1.72	3.81	1.41	120	0.40
14 女性的な (F)	3.39	1.48	3.19	1.41	3.71	1.54	120	-1.91 [†]
15 分析的な (M)	3.83	1.41	4.01	1.50	3.54	1.24	119	1.82 [†]
16 同情的な (F)	4.61	1.47	4.89	1.42	4.17	1.45	120	2.73**
17 リーダーとしての能力を備えている (M)	2.83	1.69	2.88	1.79	2.75	1.55	120	0.41
18 困っている人への思いやりがある (F)	4.98	1.35	5.15	1.44	4.71	1.17	120	1.77 [†]
19 危険を犯すことをいとわない (M)	3.78	1.64	4.14	1.65	3.23	1.48	120	3.09**
20 人の気持ちを汲んで理解する (F)	4.77	1.27	4.85	1.39	4.65	1.06	120	0.87
21 意思決定がすみやかに出来る (M)	3.92	1.55	3.97	1.63	3.83	1.43	119	0.48
22 あわれみ深い (F)	4.09	1.28	4.08	1.40	4.10	1.08	120	-0.10
23 人に頼らないで生きていけると思っている (M)	2.83	1.55	2.80	1.55	2.88	1.57	120	-0.27
24 傷心した人をすすんで慰める (F)	4.36	1.46	4.36	1.49	4.34	1.43	119	0.09
25 支配的な (M)	3.20	1.57	3.32	1.61	3.00	1.52	120	1.11
26 話し方がやさしくおだやかな (F)	4.21	1.53	4.35	1.64	3.98	1.31	108.74	1.37
27 男性的な (M)	4.19	1.47	4.51	1.32	3.70	1.57	118	3.02**
28 心が暖かい (F)	4.25	1.49	4.34	1.54	4.13	1.41	120	0.77
29 はっきりとした態度がとれる (M)	4.25	1.56	4.23	1.59	4.29	1.52	120	-0.21
30 優しい (F)	4.62	1.42	4.84	1.49	4.29	1.24	120	2.11*
31 積極的な (M)	3.64	1.57	3.51	1.64	3.83	1.46	120	-1.10
32 だまされやすい (F)	4.54	1.53	4.45	1.59	4.67	1.43	119	-0.75
33 リーダーとして行動する (M)	2.87	1.68	2.95	1.81	2.75	1.45	120	0.63
34 子供のよう純真な (F)	3.86	1.69	3.86	1.79	3.85	1.56	119	0.03
35 個人主義的な (M)	4.25	1.46	4.26	1.54	4.23	1.36	119	0.11
36 ことば使いがていねいな (F)	3.94	1.52	4.14	1.56	3.65	1.44	120	1.75 [†]
37 負けず嫌い (M)	4.88	1.61	5.01	1.56	4.67	1.68	120	1.17
38 子供が好き (F)	4.47	1.81	4.49	1.84	4.44	1.76	120	0.15
39 野心的な (M)	3.85	1.61	3.88	1.68	3.81	1.51	120	0.22
40 温和な (F)	4.75	1.22	4.86	1.35	4.58	0.99	120	1.25

[†]*p* < .10, **p* < .05, ***p* < .01

注) 各項目の () 中の M は男性性, F は女性性を測定する項目であることを意味する。

た Bem (1974) において, 小出 (1999) が指摘する性差が示されている。そこで, まず, これを確認するために, 性別を独立変数, 男性性と女性性の得点を従属変数とした対応のない *t* 検定を行った。結果, 男性性と女性性ともに, 有意な性差は認められなかった (男性性 *t* (115) = 1.33, *ns*;

女性性 *t* (114) = 1.04, *ns*)。そのため, BSRI の各項目について性差を確認するたにに対応のない *t* 検定を行った (Table 3)。「10. おだてにのる」「14. 女性的な」「15. 分析的な」「16. 同情的な」「18. 困っている人への思いやりがある」「19. 危険を犯すことをいとわない」「27. 男性的な」「30.

Table 4 性別と条件ごとの男性性、女性性と魅力およびなれなれしさとの間の相関係数

	男性性	女性性
【赤条件・男性】		
魅力	-.06	.20
なれなれしさ	.15	.08
【赤条件・女性】		
魅力	-.39 [†]	.11
なれなれしさ	-.10	-.21
【緑条件・男性】		
魅力	.07	-.22
なれなれしさ	.16	.20
【緑条件・女性】		
魅力	.17	.34 [†]
なれなれしさ	.29	.28

[†] $p < .10$

優しい」「36. ことば使いがていねいな」について有意な性差もしくは傾向差が認められ、「14. 女性的な」を除いた全ての項目において、男性の方が女性よりも得点が高いことが示された。有意な性差もしくは傾向差が認められた項目中の「15. 分析的な」「19. 危険を犯すことをいとわない」「27. 男性的な」は男性性を、「10. おだてにのる」「14. 女性的な」「16. 同情的な」「18. 困っている人への思いやりがある」「30. 優しい」「36. ことば使いがていねいな」は女性性を測定する項目である。そのため、小出（1999）が指摘する構成概念妥当性を満たす結果が得られた項目を分析に用いることとした。つまり、男性性については、「15. 分析的な」「19. 危険を犯すことをいとわない」「27. 男性的な」を用いて、改めて男性性の合成得点を算出し、男性性とロマンティックレッドとの関連性を検討することとした。女性性については、「14. 女性的な」を用いて、女性性とロマンティックレッドとの関連性を検討することとした。

男性性、女性性の得点と魅力および、なれなれしさとの間の関連性について、各条件と性別ごとで相関係数を算出した（Table 4）。赤条件の女性において、男性性と魅力との間に有意な負の相関が示される傾向が認められた。また、緑条件の女

性において、女性性と魅力との間に有意な正の相関が示される傾向が見られた。

考 察

本研究では、女性の服の色を操作するという手続きをとり、男性において赤が女性の魅力を高めるか（目的 1）、男性が赤い服を着た女性になれなくなるか（目的 2）、性役割パーソナリティとロマンティックレッドとの関連（目的 3）を検討した。以下では、仮説ごとに考察する。

まず、仮説 1a「男性は赤い服を着用した女性の魅力を、緑の服を着用した女性よりも高く評価する。」、仮説 1b「男性は赤い服を着用した女性に対し、緑の服を着用した女性よりもなれなれしくなる。」について検討する。分散分析の結果から、男女共に緑よりも赤い服を着た女性を魅力的であると評価すること、男性は緑よりも赤い服を着た女性に対して、なれなれしい質問を行うことが示された。よって、仮説 1a は部分的に支持され、仮説 1b は支持された。赤が女性の魅力を高め（Elliot & Niesta, 2008）、男性は赤い服を着た女性になれなれしくなる（Niesta Kayser et al., 2010）という欧米の先行研究と概ね一致した。本研究においても、欧米で得られている知見と同様に、赤が女性の魅力を高めるというロマンティックレッドが概ね再現されたといえる。

しかし、仮説 1a については部分的支持であり、本研究では男性だけでなく、女性も赤い服を着た女性の魅力を緑の服を着た女性よりも高く評価したという結果が得られた。Elliot & Niesta（2008）では男性でのみ赤が女性の魅力を高めたが、服部（2017）では男女共に赤が女性の魅力を高めたという結果が得られている。つまり、本実験の結果は、服部（2017）と整合した。魅力の評価に影響を及ぼす要因について、海外と本邦とに差がある可能性が示唆された。

次に、仮説 2a「男性と女性の両方において、男性性が高いほど赤い服を着用した女性の魅力を高く評価する。」、仮説 2b「男性と女性の両方において、男性性が高いほど赤い服を着用した女性になれなれしくなる。」について検討する。性役

割パーソナリティと女性の魅力の評定および、女性に対するなれなれしさととの相関分析の結果から、男性性が高い女性ほど、赤い服を着た女性の魅力を低く評価し、また、女性性が高い女性ほど緑色の服を着た女性の魅力を高く評価する傾向が示された。よって、仮説 2a と仮説 2b は共に支持されなかった。性役割パーソナリティに関する分析では、女性でのみ魅力の評価との間に有意な関連性が示された。つまり、男性においては色による女性の魅力の評価と性役割パーソナリティとの関連性はないが、女性にはそれらの間に関連性がみられた。

本研究では赤い服を着用した女性の評価を求めるという手続きを取った。赤い服を着用した女性に対する同性の評価について、Pazda, Prokop & Elliot (2014) は、女性は赤い服を着た同性を性的であると見なし、貞節を低く評価すること、自分の恋人を赤い服を着た同性から守ろうとすること、つまり配偶者防衛をしようとすることを示している。Pazda et al. (2014) による知見および本研究の結果とを合わせて考えると、男性性が高い女性は、赤い服を着た同性を、性的競争相手と見なし、魅力を低く評価する可能性があるといえよう。一方、女性性が高い女性は緑色の服を着た女性の魅力を高く評価した。男性性が高い女性は性的な女性の魅力を低く評価するのに対し、女性性が高い女性は配偶者防衛の必要性を認識しない同性の魅力を高く評価するのかもしれない。ただし、BSRI は小出 (1999) が指摘する構成概念妥当性を満たしていない項目が多い。本研究では、構成概念妥当性を満たす項目であった男性性 3 項目、女性性 1 項目を用いて分析を実施したが、本来の尺度では男性性 20 項目、女性性 20 項目であり、本来の項目数よりも、分析に使用した項目はかなり少ない。ゆえに、本研究で得られた結果については解釈の限界があるだろう。

今後の展望

本研究では赤が女性の魅力を高め、男性は赤い服を着用した女性になれなれしくなることを示した。しかし、赤は女性の魅力を高めるだけでな

く、女性にとって男性の魅力を高めることも示されている (Elliot et al., 2010)。今後はこの知見についても、本邦において再現されるか否か検討する必要があるだろう。また、本研究で性役割パーソナリティを測定するために使用した BSRI のほとんどの項目は、小出 (1999) が指摘する構成概念妥当性を満たしていなかった。そのため、性役割パーソナリティとロマンティックレッドとの関連性については再検討するべきだろう。

附記

本論文は、篠原彩氏が筆者の指導の下、平成 29 年度江戸川大学社会学部人間心理学科の卒業論文として提出したものを第 1 著者が再分析および修正加筆したものである。

引用文献

- 東 清和 (1991). 心理的両性具有 II — BSRI 日本語版の検討 — 早稲田大学教育学部学術研究 (教育・社会教育・教育心理・体育学編), 40, 61-71.
- Bakan, D. (1990). *Duality of human existence: Isolation and communication in Western man*. New York: Colombia University Press.
- Bem, S. L. (1974). The measurement of psychological androgyny. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 42, 155-162.
- Deady, D. K., Smith, M. J. L., Sharp, M. A., & Al-Dujaili, E. A. S. (2006). Maternal personality and reproductive ambition in women is associated with salivary testosterone levels. *Biological Psychology*, 71, 29-32.
- Elliot, A. J., & Niesta, D. (2008). Romantic red: red enhances men's attraction to women. *Journal of Personality and Social Psychology*, 95, 1150 - 1164.
- Elliot, A. J., Niesta Kayser, D., Greitemeyer, T., Lichtenfeld, S., Gramzow, R. H., Maier, M. A., & Liu, H. (2010). Red, rank, and romance in women viewing men. *Journal of Experimental Psychology: General*, 139, 399-417.
- 服部 陽介 (2017). 赤は女性をより魅力的にするか — 日本人大学生を対象とする概念的追試 — 日本感情心理学研究, 24, ps33.
- 伊藤 裕子 (1997). 青年期における性役割観の形成 風間書房
- 小出 寧 (1999). ジェンダー・パーソナリティ・スケールの作成 実験社会心理学研究, 39, 41-52.
- Niesta Kayser, D., Elliot, A. J., & Feltman, R. (2010). Red and romantic behavior in men viewing women. *European Journal of Social Psychology*,

- 40, 901-908.
- Pazda, A. D., Prokop, P., & Elliot, A. J. (2014). Red and romantic rivalry: viewing another woman in red increases perceptions of sexual receptivity, derogation, and intentions to mate-guard. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 40, 1260-1269.

A follow-up study on the Romantic Red phenomenon and an examination of its relationship with sex role personality

Ritsuko AZAMI and Aya SHINOHARA

Abstract

“Romantic Red” describes a phenomenon whereby the color red appears to enhance men’s attraction to women (Eliot & Niesta, 2008). Our study primarily aims to examine whether the Romantic Red phenomenon can be demonstrated in Japan in the same way as in other countries. We also aim to investigate the relationship between the Romantic Red phenomenon and gender role personality. The results showed that women wearing red clothing were regarded as more attractive than those wearing green. Furthermore, men were more likely to ask over-familiar questions to women wearing red than those in green. The Romantic Red phenomenon was therefore reproduced. Among Women, the relationship between Romantic Red and gender role personality was shown. Finally, we conclude by discussing the challenge of measuring gender role personality.

Keywords: attractiveness, red color, romantic red, sex role personality